

紅燦 3冊

紅 燦

第一卷

第二號



大正十二年七月十日印刷納本
大正十二年七月十五日發行



(圓六坪) 堅對瓦 一絕本至 界寒日格 世耐さ價 秀火重角 優耐り美 質水上一 品耐葺整 (一) (二) (三) (四)

二位一第產特の縣本來將力努意鋭り依に神精項二上
 を用信と心安卒間候に中關奮て以を味快るむしら
 に切を用愛御の瓦年萬た證保任責の遠永れらへ與
 候願奉

警 翁浪富江仙
 城 島江岡名臺
 中 警小演町鐵
 學 察林武小道
 校 詰區塲學局
 所 校常 警
 須 縣松四其線
 賀 立ヶ倉他各
 川 回江小四驛
 釀 春小學百
 造 園學校八
 試 校 十
 驗 棟
 場

願 御
面御午は處の付氣御善改亦点的違相と長特に築建右
に福幸の一忠口江り獨は上候り預に摘指御で拂先倒
候に第次るす謝感めたの業工縣本すら止

ツ一合氣もりよ先口は商□

小貓竹の子ローマンス

靜
夢
洞

(30)

(28)

(22)

位 本
長 特 の
(圓六)
るた位一第
事るた命生
た位一第産特の
を用信と心安
に切を用愛御の
築 建
場 驗 試
校
棟 十
面御作は處の在
に福幸の一忠に
候
町 會
社 一
思
ツ一

目 次

藝妓學校設立の急務……………(1)……………鐘 打 樓 人

平町民自覺の秋である……………(5)……………石 雞 迂 人

西鶴と近松の女……………(9)……………盤 骨 庵

在平實業家の酒杯とノド……………(17)……………そ れ 者

◎平藝妓評判記

一寸助、政治、力、彌、蔦、子
香 取、子、才、三

コツコ物語……………(22)……………靜 夢 洞

回馬力のかけ損……………(28)……………

小貓竹の子ローマンス……………(30)……………

回平活辯評判記

泉 哲雄、花園美代子、清水光洋、林 樂 遊

作十平見物記(二)……………(37)……………

大姐さん三方會組織……………(46)……………

◎平料理屋評判記(一)

谷 口 樓……………(48)……………

平町珍名家番附……………目 次 裏

平町珍名家番附

張出大關 青天目政之助(紺)

(籍 本) 方				東
同	前頭	小結	關脇	橫綱
壺玉モト(田)	駒組貞次郎(鍛)	弟子丸トク(研)	肥留川藤五郎(二)	寒風澤庄三郎(長)
同	同	同	同	前頭國友久(北)
針ヶ谷周藏(搔)	一柳よし(南)	壹岐寅之進(南)	一之瀬吉造(北)	前頭加神谷富五郎(田)
同	同	同	同	
淵上久(二)	北爪房太郎(番)	百澤易興(四)	祭主彦藏(紺)	
			海老根淺吉(三)	
			五味田キク(材)	
			降天龜太郎(下)	

蒙御免	
取男山二良(鎌)	行
縮女澤清仲	司
東源之助(一)	勸
西寅吉(長)	福
南爲吉(鍛)	磐
北定吉(搔)	郡
元進	平
福島繁(舊)	太郎(久)

(者留寄)方				西		
同	乾	康次(搔)	同	久栖篤(搔)	同	清治(白)
前頭	番内岩太(五)	同	迎夕キ(仲)	同	部ま(仲)	
小結	頃宮忠八(四)	同	伊古田宗藏(三)	同	善方進壽(久)	
關脇	朶光彌(四軒)	同	生出鐵之助(三)	同	格和喜悅(白)	
大關	惠比須平吉(白)	同	芋川親平(紺)	同	五味淵清(立)	
橫綱	五百扇千太郎(鎌)	前頭	礪田隆平(立)	前頭	小檜山政良(田)	

張出大關 生天目兼吉(白)

附 番 家 名 珍

—【顔つ待を主】—



甲子光子



湖月悅子

蒙御免

取男山二良 （鎌	締女澤清 （仲
-------------------------	------------------------

司 行

東源之助(一)
寅吉(長)
西寅吉(鍛)
南爲吉(搔)
北定吉(搔)

元進勸福
平郡磐城島
太力城壽
郎メ男
(久)(田)(舊)(舊)

(籍

同 前頭 駒組 貞次郎(鍛)
壺玉 モト(田)

同 一柳よし(南)
同 針ヶ谷周藏(搔)

同 北爪房太郎(番)
同 淵上 久(一)

(者留寄) 方 西

横綱 五百扇千太郎（鎌）

前頭 礪田隆平(立)

前頭小檜山政良(田)

大關惠比須平吉(自)

同 芋川親平（紺）

同五味淵清(立)

關
脇
朶
光
彌
四軒

同生出鐵之助(三)

同格和喜悅(白)

小結 頃宮忠 八(四)

同 伊古田宗藏(三)

同善方進壽(久)

前頭 番内 岩太(五)

同
迎
夕
丰(作)

同 喜 ま ち(何)

同
乾
康
次(擡)

同久村魚

同
治
十
年

張出大關 生天目兼吉(白)

生天目兼吉(白)

—【影の街の灯】—

山形家音千代



仲家勘平



湖月三月時

—【き囀の葉青】—

福清力姫



竹の家郎子



富美の家純八



甲子友子



甲子友子



福島縣石城郡湯本町字三箇

大蔵省 免許 湯本信用無盡株式會社

電話 四七番

取締役	専務取締役	取締役	取締役	監査役
鈴木 唯七	鯨岡 誠祐	藤田 善吉	比佐 賢司	沼田 淺次郎
				粥塚 富一郎

湯本信用無盡の特色

湯本信用無盡は、政府が無盡業法を施行した意を體し、社會政策としての大富協調を我福島縣に行はんと爲した。大蔵大臣の免許を受けて生れ出でた。湯本信用無盡は、政府監督指導の下に經營致します。上は全部連帶無限責任であります。各取締役は全部の確實な事は申す迄もありません。相互共益を主眼とし、組織してあります。御便利の多い点は、融通にも、加入者の御特色中の特色であります。湯本信用無盡に御加入を願ひますれば、只に加入者の利益ばかりでなく、それを致しまして、國家の爲め、政府が最善の努力を以て國家の爲め、政府が最善の社會政策の實施を以て奮つて御加入を願ひます。

(イロハ順)

平町字田町

磐城病院

電話一四

平町字田町

高久病院

電話五三

平町字南町

松村病院

電話一〇七

平町字田町

赤心堂病院

電話四七五

下駄と雨傘部新設

いつも御好評を蒙ります弊店が今度下駄と雨傘部を新設しました。

流行の粹を集めた新型揃ひ、必らずや御華客様の御期待に添ふ事と信じますどうぞ御試下さい。

弊店 良品を安く差上げ常に流行の魁と成り實用品を満載なし商ないの親信 條 切を買つて戴き永く御最負に預りたい。

下駄、鼻緒、爪掛、高級草履
麻裏、ゴム裏、スリッパ
上履類、運動靴、粹な東京地
傘其他履物一式

平町田町通り

 渡邊草履店

電話(呼)五二三番

木

卸賣

平町四丁目裏

炭

小賣

伊藤木炭店

平町二丁目

石 油 乳 劑

清關内油店

電話四十六番

平町六丁目

建築物船舶

鐵橋鐵骨機械類

ペンキ塗請負

大山常吉

植田町出張所

琴、三味線製造
並ニ附屬品一式

東京山形屋支店

平町搔埴小路

池内商店

平町新川町

阿部醫院

旅館
御料理

平公園池の端

旭

館

電話 二二六番

磐城國平町字貳丁目拾八番地

平信託株式會社

電話 二二五番
振替口座東京 二三九三五番

.....【藝妓學校設立の急務】.....

藝妓學校設立の急務

鐘 打 樓 人

階級思想の争闘は、懸て様々な形式をとつて、社會の各層に浸潤されてゐる、最近最も目ざましい運動を續けて來たのは水平運動である、所謂特殊部落として虚けられてゐた人達は、今や人間として、帝國民として、些の區別があつてはならぬと盛に自覺の氣聲を擧げてゐるにつけても、何等の意見も、權利もなく階級下層に壓しつけられて、わづかに人間生活のまねを續けてゐるに過ぎないのは藝妓諸君である。

華やかな環境と、美しい衣裳に包まれ乍ら浮かれ氣分で其日を送る彼等の日常は憂もなく、悩みもなく、悲しみもなく、祝福其まゝの生活に浸つてゐる様であるが、其

裏面には、實に血を吐く様な、悲痛さが積まれてゐる。更に彼等の末路を見る時に、思ひ半ばに當るものがある、或は人の妾として、或は一家の主婦として、或は、女としてのたしなみを持たぬ爲め人知れず血と涙を絞らねばならず、或は、藝の達者な者は、切めて師匠として、老ひ先き永からざる孤獨のさびしさに漸く其日を送るといふ状態にて、眞に家庭の人として祝福された生活を送る藝者は蓋し曉天の星に過ぎぬではないか。

こふして觀る時に、下層人として、社會から虚けられてきた、藝妓諸君を先づ人間として、藝妓といふ職業以外に「女」として引き揚ぐる方策を講ずる事は決して一片の噺語ではない、現在の藝妓は「藝妓」といふ職業以外に一步も出でてないではないか、即ち人間として、一個の「女」としての水平線に出てゐないのである。

こふした見地からして、藝妓を一個の人間と認め、「女」として見得る迄に、引揚ぐるには彼等の覺醒に相俟つて、修養機關の組織が必要になつてくる、斯に着眼した郡

山及び中村に於ては、所謂藝妓學校を設立して、藝者の徳性を涵養し、裁縫、編物、袋物、刺繡、倫理等の教授をする事に決し、既に實行しつつある、又鹿児島縣薩摩郡川内町の藝妓連に於ては消防隊を組織して相當の成績を擧げてゐるが、かくて彼等も亦社會的の活動に移らうとする現はれと見る事が出来るのである。

中村町に於ける藝妓學校の組織は大體に於て郡山の藝妓學校と同じであるが、吾人の最も會心に思ふのは、中村町にては、月二回の公休日を定めて藝妓の自由を認むる点であつて、在來一般の藝妓は、足一步を外に出づれば先づ自ら玉代を拂はねば私用も足せないといふ慘めさと不自由、勿論芝居、活動を見るにしても、お客に伴れゆかれぬ場合は、自ら玉を拂はねばならぬ有様であつて、中村藝妓組合に於て定めたる月二回の公休を規定した事は最も當を得た處置方法と言はねばならぬ、吾人の最も遺憾に思ふのは、平町の藝妓屋組合に於て何等の藝妓に對する待遇及び人間として、女としての涵養機關の無い事である。

仙臺市の百八十人よりわづか三十人より尠くない藝妓數を抱く平町に於て何等の施設方法無きは寔に遺憾千萬である。

□

平の藝者は他の地方に比し、風儀が亂れてゐると言はれる反面には、彼等の徳性を涵養する何等の施設機關が無いからであると言ひ得られる。

平町に於ても、如上の点に着眼し、郡山、中村、其他の藝妓學校組織を參考とし斟酌し、一日も早く此種機關の實現を望んで擱筆する。

平町民自覺の秋である

石 鶏 迂 人

郷土美を以ての平町讃仰

平町が、現在に於ける本縣下の位置そのものは別として、現制度から見れば濱街道筋の一大都會たるに在いては、何人も否み得ない確實なものであつて、異變そのものが兇暴を逞しふせざる限りは都會としての尊嚴を決して失ふものではない……、現勢を築いた歴史的道程から見ても……平町民が時化に叛逆せざる限り、現在町民の努力が一朝にして幻滅せざる限り、この姿の延長であらねばならぬし、發展膨脹は毛頭疑ふ可き筋合にわかれて居ないと信ずる、しかしながら、表面に現はれざる内在的時代錯誤が擡頭してゐるとするならば、自分としては何事も緘口するに限ると思ふ、といつて郷土美そのものを唄はずにはたかれぬ、況んや、成る講策に依つて、愛すべき平町が市制を施行せんとする途上に横はる幾多の障害を、容易に除去し得べしと信ずるその

時にたいてをやである、わが東北の無史以前（吾人の智識限にたいて）は兎もあれ、崇神帝の御代、景行帝の朝以來、磐城の歴史は、史實そのものとして、光輝の耀灼はあり、詩歌的讚美に價するのは勿論、咏歎にはなほ餘りある、彼の事實を探討せんとして失望する所謂史家その者の言説はこの稿にたいて私の是非する處ではないが、超史實的にして神秘的垂跡の極めて豊富なるわが磐城は、歴史美の直參と言はねばならない、四圍の傳説、山海の清絶共に本縣の首仙境であらふ、斯くの如き歴史と美譚と景勝とに育まれたる平町は、洵に環境の寵幸に耽溺するものといはねばならない、その平町の起つたのは、井上備後の城主となり、安藤對馬守代つて治めて以來のことに屬する、現町民の氣風の一部は今尙當時を偲ばせるものがあるのも故あるかなである彼の坂下門外に至忠の鮮血を流したる、信正公に至つては文久年間の一大史彩として後世に傳ふ可きものであり、磐城人士の誇りでなければならぬ。

平町發展は獨自にあらず

さて、然らば平町今日の發展は如何にして促致されたか、町民獨自のものであるかどうか、時勢にもよるであらう、位置にもよるであらふ、機運にもよるであらふ、その他種々なる原因はあるであらふ、然れども、これは平町の膨脹として、はた又隆興として見逃がすべからざる重大な問題であらねばならぬ、また研究すべき事柄であり内容であらねばならない、これをしも見逃がし研究しないやうな町民ならば、將來の發展は空虚なものでなければならぬ、否な、發展は空中の樓閣といつても差支はないものだ、何故とならば、その要素を知らずして、所謂土壤關係を顧慮せず……大廈高樓を築かんとするものに等しいからである、是までの發展には發展す可き自然的の要素があつた、平町今日の偉觀は要するにその要素即ち基礎に築いた立体面であり反映であらねばならないからである、しかしこれから後は平町發展の道程を傳統的にしようとする習癖は毛頭許さる處ではない、思ふに地方的にいふ、富の集中もあつたらふ、事業の發展にもあつたらふ、しかし、最も重要なのは周圍そのものが今日の大を爲さしめたといふ事を決して忘れてはならない、しかれば周圍とは何にか、内郷、

好間の夫れであり、平窪、草野、湯本、鹿島、小名濱、四倉、神谷、大浦、その他を指すのである、内郷・好間は常磐炭の本地だ、是の二ヶ村が過去六十年間に發展してきたその状況は寧ろ驚異に價する、しかも人口は殆んど平町と相匹敵するといはれてゐるではないか、この發展こそ平町の發展でなくて何んであらふ、内郷、好間共に人口にわたいてのみは平と相對峙し得るとは言ふものの人間生活として要求する施設即ち設備はどうか、あまりの貧弱さではないか、今日にわたいてこそ炭山經營の不止得關係から、經濟のゆるす範圍内にわたいて相當設備をしてゐるが、矢張りあまりの貧弱さといはねばならない、そこに平町の存在と發展とがあつたのである、光榮もあつたのである、自餘の町村は何れも需給關係にわたいて平町發展の資料となるべきものを調節したといふ境地にたかれてゐる、故に平町の消長は環境から誘促さるるといふ論斷に何等の拒捍力を有し得ない事實をまざまざと見ない譯には行かない、若し是事の事實を強硬に否定する者があるとするれば、夫れは自己力の過信であり、認識否定と合理否定の自己破綻に陥る痴者であらう。(以下次號)

元祿の
文壁
學雙

西鶴の女と近松の女

二人は女性といふものを
どう取扱つたか

蠻骨庵

▲西鶴、近松、この二大文豪は、さまざまの意味で我國近代文藝を飾る大きな明星である、この二人が、一体、女性と云ふものを如何様に取扱つたか、西鶴の描いた女性と、近松の描いた女性とドンナ風に異つてゐるか、そして其ういふ相違はどこから來たか、そしてそこには何等かの文化史的意義は無いのか。極はめて興

味あることであるし、研究すべき問題であらうと思ふので、自分が今日まで此の二大文豪の描いた創作物の中で、特に感じた一二の例を上げ、兩者の異なつた点を紹介して見やうと思ふ。

▲何人も知る通り、西鶴と近松とは、實に優劣の無い元祿文學の雙壁である、そして二人とも、共に女性描寫に非常に妙

を得てをる、しかし、同じく元祿時代を背景とし、同じ時代の女性を描きながら二人の描いた女は味いの上で非常な相違がある。

▲西鶴の描いた女の代表的なものとして「好色一代女」及び「好色五人女」の二つがある、この題の示してゐる如く好色の女の一代記で、十三の時から六十幾才まで、男と戯れた物語りで、こ

■平藝妓評判記【二】

仲家一寸助

平の姐さん株である。藝も達者、男の呼吸も萬々呑み込んでゐるので待遇にヌカリがない。日本髪より束髪が女優に東ねた姿をよく拜見するが、それでゐて濃艶さを失はない、太鼓などは抜きにして新内か清元でも靜かに弾いて貰つたら、まさに一刻値千金であらう。

の一篇を通讀して何よりも第一に感ずる事は、極端な肉慾の謳歌と、極端な官能の追求である、飽く事の知らぬ性慾の満足である。この女主人は最初舞姫となつて十三の時から戀を覺て次ぎは或る國主の艶妾となり、次は島原の女郎に賣られ轉々として遂に淫賣婦と成り下り、轉じて町人の腰元となつて、まんまと素人女

になり濟してゐたが、中々浮氣心を忘れ兼ね、主婦の眼を盗んで主人と通じ、主婦を離別させやうとして暴露して追ひ出され、ついに狂女となつて「欲しや男、男欲しや」と狂ひ出したが、やがてその内に夢から醒めたやうになり「まことなる心ざしに替り、惡心去つて扱てもく我あさましく、人を呪ひし報ひたちごころをさらすと懺悔して」眞人間にかへるしかしこれも一時であつて、獨寝の夜毎夜毎彼女を苦しめるものはやはり男欲しやの情念であつた、そして機會あるごとに男を求めて官能を満足させてゐた、然

し次第に寄る年波に従ひ身を持ち下げて或る時は茶の間女となり或時は茶屋女となり、更に下落して宿場女郎となり、つひにヤリテ奉公までするやうになつた。「好色一代女」は實に斯ういふ性慾追求の生涯を経た女の一代記である。そして終りには、京都の或る寺に詣で、五百羅漢を見て、その五百羅漢の形ちが「皆々逢ひ馴れし人の姿に思ひ當らぬは一人もなし、過ぎし年月浮流れの事ごもひとつひとつ思ひ廻らし、さても勤めの女はご我身ながら恐ろしきものはなし、一生の男數萬人に余り身はひとつを今に、世に

永生きの恥なれや浅間しや」といふ心持ちとなり、「胸に火車を轟かし泪は湯玉散る如く」なつて、一念始めて發起して佛門にはいるといふことになつてゐるが、これは表面の事で、心から過去を懺悔してゐるのではない、又心から無常を感じてゐるのではない。其の證據には多少でも好色の男によごまれると「いつとなく心亂れて常に弄びし絃すじ鳴らして戀慕の詩を唄ひ」ながら、以上述べた様な一生の物語りを得意げにするところによつても推し測ることが出来るのである。要するに「好色一代女は」肉慾萬能の女の

一代記である、性慾上一個勇悍なる女丈夫の自叙傳である、同時に其處に描かれた世界は肉慾謳歌の世界である、官能満足のためには何物をも犠牲に供しても憚らない大膽な美的生活の天地である。そしてこの肉慾謳歌の世界の中に描いてあるところこそ今日の吾々が、この作を文化史的に見て非常に興味のある点に外ならないのである。

▲次が近松の描いた女の代表的なものを求めるならば、何人もその有名な傑作「天の網島」を挙げるに躊躇しない、「天の網島」は可なり複雑な作であつて、今日

の言葉で云へば、戀愛の所謂三角關係を描いたものである。即ち紙屋治兵衛を中

■平藝妓評判記【二】

野口政治

半玉時代はお江戸吉原で腕を磨がいただけあつて、オシもオサレもせぬ立派な大姉さんだ、藝も好きだが議論も好きだ、一分のスキのない姐さんだ、確かに立派なものだ。悪口家でここにて居る福新主幹の三田白夜氏が「政治のフクラミと柔ラカミに感心し爾來平藝妓の悪口を謹しむ所存に候」と某所へ通信した程……サ様にエライ。

心に、妻のねさん、遊女の小春といふ三つの戀愛關係を描いたものである。もし

て治兵衛にしても、妻のねさんにしても小春にしても、何れも近松の描く代表的人物であり、且つそれらは當時の元祿時代の代表的人物であるといふ意味で文化史的にもこの作は重要視するべきものである。この作は大傑作だけに世人の多くは充分耽讀し或は劇などでもよく承知してゐる事であらうが、未だ讀んでゐない人々の爲めに荒筋を掻い摘むで書いて見る事にしよう。

▲大阪天満の六間口の可成りに身代の大きな紙屋の主人公である治兵衛といふ男は、たさんと云ふ貞淑な女房もあり

二人の間には可愛い子供もある身でありながら、紀の國屋の抱へ小春といふ遊女と馴染を重ねる、始めは其れ程でもなかつたが、同じく小春に通つて來る太兵衛といふ客と張り合つて益々二人の間は濃密となり、兄の意見も、女房の諫言にも耳を貸さず、上り詰めた結果は、流石の身代も次第に傾きかける、足下を見て小春の抱主は、最後には治兵衛に小春を逢はせまいとする。其の間につけ込んで金に不自由の無い太兵衛は小春を根引きしやうとする、小春と治兵衛との仲は、三年越しの馴染みで廊中の評判であるだけ

今更小春を他人手に渡す事は治兵衛の男の一分が立たず、小春も亦、毛蟲のやうに嫌つてゐる太兵衛に受け出されることは死ぬよりも辛いことであり且つ自分の愛してゐる治兵衛に、男を捨てさせては女の人情と義理が立たぬといふ女の意氣地から二人はついに情死を決した。

これに氣づいたたさんは、夫の一大事「あまりの悲しさ、女は相見互いの事、切られぬところを思ひ切り、夫の命を頼む」と手紙で小春にかき口説く。その心に感じて「身にも命にもかへられぬ大事の殿なれど引かれぬ義理合ひ、思ひ

切る」この返事を小春からたさんに送る
 ▲自分の妻と自分の戀人との間にそんな約束があつたとは露知らない治兵衛は、兼ねて約束の心中を遂げる爲めに小春を誘ひに來て、小春の心のすつかり變つた事に驚き呆れ、地團太踏んで「誤つた」三年前よりこの古狸に見入れられ親子一門妻子まで袖になし、身代の手廻れも、小春といふ屋尻切りに騙され、後悔千萬と云つて口惜がり「やい狸め、狐め、屋尻り切りめ」と罵つて尙足らず、足で小春の額を蹴る。小春と治兵衛との間は、實に、治兵衛自ら云つてゐる通り、「足か

け三年戀し床しも愛し可愛いもただ足一本の暇乞ひ」となつてしまつたのである
 ▲治兵衛は斯くして再び元のあたゝかな家庭の幸福に漬る事が出來たのであつた然し惡戯の運命の神は、彼等の幸福な家庭を、いつまでも持續せしめなかつた。治兵衛と競争した太兵衛は、小春と治兵衛との間が切れたとなると金づくで小春を身受けしやうとした、其れを聞いて第一に驚いたのは治兵衛の女房たさんであつた、太兵衛を蛇蝎の如く嫌つてゐる小春は、それだけでなく、あの義理堅い女が、太兵衛に身受けされたなら彼の女の氣性として、決して生きてゐないといふ

事をねさんは知つたからである。もしおさんが、小春の受け出されるのを、見ぬふりしたなら、見ながら小春を殺すやうなものであり且つ、自分から手を下さないとは云へ、間接に小春を殺すことになるわけである。これでは女の道にそむく自分の頼みを聞いて命にも替へ難い戀仲を、別れて呉れた小春を殺しては、小春に對して義理が立たぬ。ねさんはかう思ふと、矢も楯もたまず、一切を夫に打ちあける。治兵衛も今更のやうに驚き、小春を惡罵し足蹴にした淺薄と輕忽を恥ぢ、同時に何んとかして小春を助けなけ

ればならぬと決心する。それには何によりも必要なのは金である。太兵衛の受け出す前に何んとかしなければならぬ。夫婦は相談の上、簞笥の中の夫婦親子の衣服悉くを入質して金を調へやうとするところへ折悪しく這入つて來たねさんの父親は、此の体を見て大いに怒り、無理にもおさんを離縁して連れ返へる。治兵衛はねさんを離縁された悲しみと金策盡きて、小春を救ひ得ない絶望から、ついに小春を誘ひ出して、網島の大長寺で心中をするといふのが、「天の網島」の荒筋である。(以下次號)

在平實業家の酒杯ミノド

それ者

創刊號に於て在平新聞記者ノドくらべを書いたが世間一般から感心せられる様な有力者は居らぬと云つてさしつかへ無い二三コレはと思ふものも新聞記者の中では上手だと云ふに過ぎない、世間へ立しては一人で歩けるものではない、上手な者が無いと云ふのが癪だから無理ヤリに譽あげたに過ぎない極めて貧弱な情勢にあるが其れに引きかへ在平實業家中には千軍萬馬の間を往來した古武者が多い事とて將に堂に這入つて居る方が澤山ある、イデヤこれから見参ケンザン。

▲小田吉治君 よく遊ぶとしてよく酒を飲む。酒を飲むと大聲一番ドシナル癖がある飲んだからドシナルのかドシナルのに飲むのか其邊の境が天下何人にも判然しないドシナリ勢れると異体の知れない都々逸、磯節をウナリ出す蓋し天下の一奇觀か、確に磐城の名物男の名に恥ぬ。

▲中野甲藏君 小田君との飲み友達だ小田君の座敷には必ず影の形に添ふ如く膽汁質の身体が発見せられる、酒杯三杯にして小田君ドシナレば中野君ドシナリ龍虎争ふの壯觀を時々演ずるも大抵は超然として流行節に努力するも達者なりとは何人も思はぬ程度のものだ、嘗て清元を習つて一泡吹かすつもりだつたんだが三日にして断念して蚊弟子の尊稱を得たる光輝な歴史を有する由だ、甲某乙某に問ふて曰く「中野さんは唄は上手な筈と思ふて居たに案外ですわ」と乙某答へて曰く「態からみるとそうなわけだが中の構造(甲藏)の加減だ」と唯れだ悪口云ふのは……？

▲大原長太郎君 謠曲の大家を以て自任して居るだけあつて萬事謠曲式だ、酒ときたら目が無い町内の知人を訪ねて二日位泊りがけて飲むなんか敢て稀らしくない程の

■平藝妓評判記【三】

福 清 力

彌

ザツクバランでゐて戀には仲々真剣である。風のない春の假寝に雲雀のさへする聲を聴く様な廻り遠い戀でなく、香水を吹きかけた牡丹の香を嗅ぐ様な激しい戀であるらしい。

ノドも好い、お世辭もうまい。

傑物だ唄で知つて居るのはドドイツにサノサの二つ切りだが然も大膽に立ちあがつて仕舞の身振りよろしく踊り抜く其度胸には何人とも雖も感服せぬものは無い、在平實業家中最大の珍藝所有者だ。

▲鈴木辰三郎君 酒は一向にいかぬが宴會は好きだと云ふカイ物だ。女と政治とはドチラも飯より好きだとの風評あるも筆者愚にして知らず唄のウの字も御承知ない、時には覺わ様とするのだから文句だけは覺わても節は全々モノにならぬからやつてみやうともせぬ、所謂此道のテイノウ兒だ。唯だ知つて居るのは悪口許り、此道にかけたら將に勇將だ。

▲草野順平君 謹嚴の士か酒は極量二三本と云ふ處、イツモニニコして酒杯をナメて居る時に藝者を素見てみる事もあるが到底モノにならず反つてやり込められる位が落だ、カ程にオトナシク出来て居るが故に唄は全く唄はぬけれど、藝者にモデルこの事ア、コレは細君に内密だよ君。

▲端山正男君 初めの程は下を向えてチビリ、チビリやつて居る、中程ニコニコして

遂に其の至るを知らぬ強者だが未だ自家の存在を忘れた事が無い、大道を右左に歩いてドーにかタドリつく、唄は唄ふに非らずしてウナルと云ふが適評だらう。

▲井上茂作君 兄の浩忠氏と共に酒はやらぬが遊びは好きだ二次會三次會のつき合も敢て辭せぬと云ふ、コノ道の奥儀を極めたものだ。某君井上君に「酒を飲まずによく遊べるもんですね」と問へば君言下に「僕は遊びの氣分を知つて居るからだ」と答へる、かるが故に唄は端物ならナンでもやる特に鴨綠江節は最も得意とする處、微妙な音聲を出して三味線に乗せて行く處なんぞ天下無類、稱す可きか、時に安來節を唄ふもモノにならぬ、アレで機嫌取り取り唄はして置けば一日一晩位はウナリつゞけるものであらう、最近井上君の名歌として世に傳へらるゝ都々逸あり「ケツの穴から虱を取つて、かんでみたれば瓜の種」と蓋し美化運動の宣傳歌ともなす可きか。

▲中野浩忠君 日本國に於ける安來節の先生を以て自任して居る。縣下に君の弟子千八百名にのぼるとの事程左様に熱心家である、曾て平の某藝妓を東都に同伴して安來節を習はし或は東京より福島へ向ふ途中、白河の某妓が將來有望なりとしてワザワザ

下車し一日教授したと云ふ歴史を持つて居る、君に會つて談たまたま安來節に及べば途上なると或は用件中なりと委細かまわす「安來名物荷物にやアなアらぬ」と先以て手本を示し「君一つやつてみ給へ」と來る全く以て大家で御座るエサツサーキタコラサ

▲佐藤庄太郎君 晩酌は絶對にやらぬが酒は大分に飲む、満身之れ膽と云ふ圖態を斜に構え飲む程に目を細めウハアハの豪傑笑は一段と頻發する其様は仁王様の身体に恵比須様の顔を取り付けた様だ、酔に乗すると古巣を襲撃し「ナンだつてカンだつてしようあつかマツ」と腰を落ちつけトロケそうになつての御機嫌だがウタは一向に存じ申しぬ由。

▲井上貞治郎君 最後に若い處を照會する、親ゆづりだけあつて堂々たるものだ酒は親よりも飲むとして唄はねば氣がすまぬ、高島屋の聲色は地方及ぶものなく二上り新内、端唄、都々逸其他流行節一般に亘り優美なトロリとする様な調子の所有者で音曲萬般に亘つて君の右に出るもの蓋しあるまい、將に在平實業者中の白眉だ。だから奇麗なのにモテるが馬耳東風ときゝ流すところなんざ偉い。

コツコ物語【一】

静 夢 洞

吾輩も矢張り母の腹からワン、の一聲とともに生れ出たものだ。もう吾輩も一歳と七ヶ月になる此の家の一人となつてから一年四ヶ月その間世の暗面を種々見せつけられて割合に早く性に目覺めたのだらう。どうせ一度は死す可き身だ紅爛へ頼んで色女のビスに言傳をして貰ふか。

× × ×

▲懐しいビス子様 今日雨ですね。昨日の雨は随分降つたね僕んこの天井に大きなシミが出来て御主人が大騒ぎなんですよ。

僕の主人と云ふのは貴女が知つてゐる様な客ちゃん

平活辯評判記

一 記者

活動辯士の人格的非難は兎に角として、彼等の思想に就て乃至は技術方面より書いて見やうと思ひ乍らも今近評判すら書いた事がなかつた。今こゝに自分は活辯社會を背景として感んじたまゝを書いて見やう。(妄言多謝)

□

▲泉哲雄、花園美代子

平 館に怪人が二人居る。洋劇

.....【語 物 コ ツ コ】.....

はなんですよ。(何しろ女の手一つでこれだけやつて行くのだからでせうが)

雨もりなんかのときの大騒ぎと云ふたら癪とか云ふ病氣で驚かされるのと同じ位なんですよ。

主人の商賈はあんな精理屋と云ふのでせう、それで入つて来る人によつて僕も可愛がられたり憎が

られたりするのですよ。よそ目では楽しそうに見ねても家へ入つて見ると何處も同じ秋の夕暮れで

御座んす。何時もやつて来るIさんとか云ふで、こ

頭は僕をいぢめて面白がつてゐる。あんな時はつくぐ、犬の悲哀を感じるね。

▲ビス子さん 僕を一人心から可愛がつて下さるのは下子と云ふた藝者様ですよ。他の藝者は人の

擔任の泉哲雄といふ若く美しい顔の持主がその一人である。彼の説明は斯界に於ける長い修養と洗練の結果鮮やかな説明ぶりを

を見せてゐる。けれど矛盾と錯誤で築いた半可通の哲學的思想に因つて稍もすると氣取つてゐる感がある。聴く者をして折々

呆然たらしめる處、強ひて言へば、哲學的思想が神境に達した

妙味とでも言ふのかしら。

もう一人の怪人は彼の妻たる女辯士花園子美代である。生れは

.....【語 物 コ ツ コ】.....

前であんなしく見せたがつて表面は大層親切の
だけだ客等が不在だと女の本性を出して……失
禮ビスさんとK子さんだけは別物ですよ……打つ
たりするの、そんな時はワンと食いついてやると
キヤトと叫ぶ意氣地なさ何時でも僕は快!!痛快を
禁じぬないんですよ。

人間て氣儘なもんですな。

▲ビス子さん 一つ面白いところを話させようか
あなたは酒屋の一匹ものだから女の圖々しさを見
た事がないでせうが僕なんか毎日毎晩その醜体を
見せられるんですよ。一昨夜ですよ、丁度あなた
と逢曳しての歸り道、家の二階から下を見てゐた
のが三葉屋のM子さん、だつて一時でせう!!○○

北海道で、説明も地味である。
女辯士として聞ける様になつた
のは最近の事らしい。

ボーッとした哲學の達人哲雄君
は自宅二階八疊の家庭に於ても
夫人美代子氏を相手に獨特の頭
惱、奇怪極まる獅子吼のいた論
をやるのも説明の練習とは言へ
愈々怪人の怪人たる所以として
一笑に値する。

▲清水光洋(帝國館) 彼は新派
俳優上りだそうだが、これが遺

○○○○(此間十八行略)○○五十男の禿頭とな
めたり○○○僕も人生轉た荒涼を味ひましたね
▲ビス子さん 昨日は一度も遇ひませんね。何ん
だか僕も淋しくつて仕方がないの、けれど主人が
不在で今日も遇へないかも知れないわといふのは
家の主人も女でせう、で時折は浩然の氣を養ひに
行つたんですよ、何處へ行くかは頭のシラミ君は
御存知でせうが僕等には不明だ。又明日あたり晴
晴した様な疲れた様な恰好で歸つて来るんでせう
人間の女は暗流多し?一人ものがあきれあ!○

○!○○!○○○
主人の不在!女中の横暴!コツコの不満!何故女
はこんな汚いんでせう。おどめこねふちと二人

憾なく説明に表はれてゐる。聊
か古臭い感がないでもない。
けれど新派、舊派、洋劇の如何
を問はず當つて碎ける主義の大
膽さは將に賞讃して餘りある。
舊劇は悪役が得意、先月の忠臣
藏の大石をやつたのは失敗であ
つた。君は映畫を背負つて立つ
時、観客をして識らずく映畫
の中に心を引入れやうとする努
力と技巧を修める必要がある、
これが春秋に富む君にとつて將
來名をなす唯一の道であらう。

女中が命の洗濯の最中でその話したらありやしない。

「おふちさん、毎晩いくらになつて？」

「だめよ！ たつた二十錢！ それも大きな顔をして「それやる」だつて、あきれたねこの不景氣には」

「まつたくだわ、私なんかこの一週間で五十錢だもの、でもあんたはいいわ、良い人がついてるから」

「あらいやだ、あんただつてあるんじゃないの、そしてなぬにこの間私が睡むつてゐると思つて

三番でなぬに」

「ふふんだ、人のやる事なんか世話やかないで頂

▲林樂遊（平館）少々氣障な説

明をやる。映畫剛にとつて、これが或程度まで観客にシンミリした感を起こさずとも知れない。けれど映畫に對する現解がもう少し必要である。荒みきつた思想で映畫そのものを破壊する——活辯にとつてこれ程重大な問題はあるまい。君の説明は感銘的である。映畫によつて教化され其の瞬間に體驗する一種の感激が口よりはとばしる様な明説ぶりには熱情が籠つてゐる。

戴自分だつて満員に務めた事ない癖に、おとどひのTさんの勘定を何ふしたの」
「何したつていいでせう。少し位かせがなくツちややりきれないや、そんな話よりア」
「さんの事でも考へなさいよ」
「親切だわね。だけど、未來のハズだと思ふと少し物足りないわ」
こんな話を聞いてゐるとどんなになるかわからないから僕は早速臺所へ出張した。いや汚い。く。(つづく)

☐七月賣出レコード

平では近頃、長唄、清元等のレコードが賣れて來た。七月の新譜賣出しは、長唄浅妻船、清元三社祭、琴曲吾妻獅子、尺八越後獅子等が主なるもので、就中三社祭は喜久太夫に絃清元梅次上調子同東三郎の優れた音譜である。

(平四・會田時計店調)



馬力のかけ損

新田町○家の○子が去る六
月十日、帝國館に開かれた
縣教育大會の慰安會に色氣
のない先生方の集つた舞臺
で石城名物「四季の踊」を
唄つた。始めのうちは銀杏
の鬢を斜に見せて静かに唄
つてゐたがだん／＼真直に
なり、追々車輪になり、蜜
蜂の入口の様な鼻を怒らせ
乍ら偉い馬力で唄ひ始める

れに消されて仕舞はない様
に一生懸命で唄つたのだと
いふそれでは始めの面を斜に
向けて唄つたのは如何いふ
理由だと言へば、あれは三
味線が「政治」姐さんといふ
大した三味線だから、姐さん
のた底であれたけに唄へた
んだと言はれるのが口惜し
いので、それで三味線と唄
と判然分けて聞いて貰へる
様にあつたのですわ、と
いふ。詰らない氣兼ねをし

たものだねと言つてゐるう
ちに、遽に急いで廊下の突
當りに居た客人の背をボン
と叩いた。客人（若い背廣
の先生）驚いて後を向くと
其處に見た事のない奇麗な
女が立つてゐるので首を下
げて挨拶をした。○子さん
人違ひをした體よろしくた
詫びして又記者の所に戻つ
て来て、失禮しちまつたわ
まーさんと間違ひたのよご
ある。これで問題の謎はす

に言つてもつと惚させるた
めだらう—とは言ひ、人違
ひで骨折り損のクダビレ儲
けとは氣の毒／＼。





小 猫 竹の子 戀愛ローマンス

ありしその頃の

平二萬の人々を酔はした松ヶ岡公園の
櫻も散つて、鮮やかな緑の葉蔭に、青い
小さな實が漸く膨れ初めた去年の五月で
あつた。

先年の秋の末、花にも劣らぬ魅力と人
氣とを一身に浴び乍ら、平の若い男女を
恍惚として夢遊の境地に導き、彼等が取
絶る憧憬の袂を空しくも打ち振つて、そ
の儘平を去つた劇界の花形「下山竹の子」

が再び平町を訪れたといふ辻ビラが街々
の四角に張り出されたその日の夕方であ
つた。

新田町藝妓屋の半玉小猫は、その廣告
を姐さん達と梅の湯に漬り乍ら見て歸つ
た晩嬉しくて堪らなかつた。

「猫ちゃん、今日はごうかしたんぢやな
くつて……」

と姐さんやお客は揶揄ふ様に言つたりし

た。小猫は稍もすると燥き切つた口元を
兩袂で押さへ乍ら、た銚子を姐さん達に委
せて下階へ降りて行つた。そして階段の
薄暗い電灯の光を浴び乍ら、た太鼓に結
んだ博多の帯間から懷中鏡を取り出して、
その裏に藏ひ込んである寫眞を、熟々眺
めた上、頬に當てたりして微笑んでゐる
彼女の姿を見て、客や女中や乃至は朋輩
の姐さん達さへもそれを解き得ぬ謎事と
して好奇の目を注いだ事であつたらう。

——子供の小猫にもうれしい戀が萌して
ゐた。けれど彼女の戀の對照が果して何
人であつたかは筆者の斷言する如く誰れ
もが疑問中の疑問として知らんとして知
り得なかつた者であらう。

彼女が先年より「下山竹の子」に思ひ
を寄せてゐたのであつた。

竹の子一座が愈

今日初日を打つて

いふので町廻りに

出掛けた時、小猫

は恰度客に呼ばれ

て「梅林」の二階に

居た。床軸の前に

は赤銅の水盤があ

つて、それには赤

と白のチューリップが笑ふ様に咲いてゐ
た。

富美乃家 蔦 子

富美乃家 蔦 子

子

サイダーよりアルコールが良いらしい。
微酔氣嫌で鬢の邊りに薄紅を染めた千鳥
足で歩く姿を見ると夢の様な氣がする。
座敷では割にたどなしいけれど、興乗
すれば江戸の俠客の仕草を真似て、人さ
し指を小鬢の所に持ち上げて啖呵を切る
それが又艶かしい。

小猫はその花を窓口から投げてやつた。
投げる前に小猫はその花に熱い接吻をし

た事は言ふまでもない。「竹の子」は自分
の膝の上に投げられた赤いチューリップ
の花を見て驚いた儘の可愛い、目を向け
て窓口を見上げた。と其處には白魚の様
な何とも言へぬ奇麗な小指を頬に當てた
儘窓口に靠れて、濡れた様な瞳で微笑ん
でゐる小猫の姿が目についた。

初日の聚樂館は大入であつた。大向ふ
からは絶えず割れんばかりの拍手が舞臺
の「竹の子」に贈られて、その中で女神の
様に踊つた彼女が下袖に引き込んだ時正
面の浅敷に居た小猫は、オリヂナルの香
りを残して立ち上つた。

桃割れの小猫が思ひ決つて座長竹の子
の樂屋を訪れた時、「竹の子」はたつた
ま大工に扮した印半天の三尺を解いて、
襦袢の厚い座布団に肘を突いてゐた。
「座長さん、御めん下さい……」
かう小猫が言ひかけた時、「竹の子」は花を
投げて呉れた彼女を思ひ出せなかつた。
そして「入らつしやい」と眞の形式的の挨拶
をしたに過ぎなかつた。

小猫にとつては、舞臺の「竹の子」に長
らく憧憬してはゐたものの、目の前にう
れしい「竹の子」を置いて座つたのは今日
が始めてであつた。だから彼女の張り割

ける様な胸のうちを打ち開けて見度いと思ふものゝ子供心に、況して初恋といふ重荷を背負つてゐる小猫には、連も口が開けなかつた。そして頭髪を角刈りにした「竹の子」の顔さへ真直には見られな様な遠慮心から、ただ自分の麻の葉を縫つた錦紗の振袖を掻き合はして坐つてゐただけであつた。

翌日小猫は、松月堂から柏餅を取り寄せて再び樂屋を訪ねた。

「去年平にわいになつた時から、あなたに逢ひして、しみみりた芝居の話してもおきゝし度いと思つて居りました

の

とこれだけを言つた小猫の顔は紅かつた「竹の子」が茶を淹れて小猫に進めやうとしたその手を押えて

「妾しが差し上げますわ」

と小猫が進んだ時、劇道に揉まれ切つた「竹の子」は小猫が自分と並ならぬ思ひを

寄せてゐる位の事は見逃し得なかつた。

「猫ちゃんは妾の事を屹度男だと思つてゐるですよ。角刈りなんぞにしてゐるも

んだからね……」

と「竹の子」が小猫の歸つた後、一座の人に話した時

蘭平藝妓評判記【五】

林家香 取

「男か女かは聞かなかつたけど、今日花道の影で僕に座長の年やなんかを盛んに細顔で願ひのどがつた男好のする顔だ、踊も三味も確なものだ、五萬石の踊りは此妓獨特のものであらう、元氣でイツもハシヤイで居る會つて嫌味の少しも無い奴だ「妾した寶さいあればイツでも嬌るんだだけども」とバツチリとして眼元をお客に投げる容姿はこの妓の千両とする處だ。

きいてゐました」
等といふ者もあつた。

果して小猫は「竹の子」を男と思つてゐたのであつたらうか……。そして異性に對する哀れな初恋の思ひを寄せてゐたのであつたらうか……。

小猫は毎夜「竹の子」の樂屋を訪れたけれど「竹の子」は自分が女であると言ひ得なかつた。

小猫はこの初恋を姐さんや朋輩衆に打ち開けるには余りに生幼な半玉であつた。それが爲め震ひ付いて耳元を舐めてもやり度いやうな戀の悶の裡に遂に「竹の子」と別れなければならなかつた。

記物見平十作

.....【二】.....

人力車が九時頃三臺來た。ワシは大島の着物に着替え、十蔵は洋服を着て奥の間で家内中残らず集めて不在中の注意をしながら出ばなを飲んだが一生の別れになる様な気がしてならぬ、荷物は全部柳行李に入れて持参する事になった。十蔵が簡単に「サア出かけませう」と抜かす。旅行と云ふものはソナに簡単に参るものと心得て居る十蔵メは不埒千萬な奴だ。留守の間心配の無い様に申し置く事が幾らもある。それに佛壇に線香をあげねば出られぬものではない。親爺と祖父さんの位牌に暇乞を告げるとしやう。

「皆の衆、行つて来るぞ」

十蔵の出してくれた車馬乗用の鳥打と云ふシャ

小猫は「竹の子」の半纏着の姿を何よりうれしいと思つてゐた。

「妾しも半天を眺めて踊るわ……」

これは「竹の子」が聚樂館を引揚げて平を去る前の日、小猫が「竹の子」と連れ立って新川の畔を散歩した時言つた言葉であつた。

小猫はその言葉を守つた、そしてやがて平名物の盆踊りが近づいた時、小猫は名入れの半纏を染物屋に眺えた。そして「竹の子」の大作の様な可愛い、姿の彼女は、その懐しい姿で紺屋町、郡役所通り、南町、鎌田、次々に踊り廻つた。

三日程経てその姿を寫した寫真が、宇都宮劇場の「竹の子」の手元に届いた時、

「竹の子」は

「猫ちゃんも女の様には見えますね」

と葉書に書いて返事を寄越した。これを見た小猫は果して「竹の子」が男か女かを判断し得たであらうか。

けれど小猫と「竹の子」の戀は硝子の器に金魚を入れた様な美しい戀であつた。

今では素人となり済ました彼女は遠い濱松の空で、過ぎた日の聚樂館の樂屋に於ける繪の様な場面を偲んで密かに懷舊の情に耽つてゐる事であらう。(終)

ツボをかぶつて初めて人力車に乗った、何んぞなく一段偉くなつた様な気がする。村の衆がみたらに醫者様に見ゆるであらうの、初めてシャツボをかぶつてみたが頭がもうもうとして氣色の悪いものだ。一体シャツボは何の爲めにかぶるものかしら、天道様の目を避ける爲であらう。そうなら毛唐のシャツボよりは古來からある手拭の頬かむりの方が餘程良い筈だ、日もさけられるし風も防げる、第一温くていい。シャツボの様に空氣の抜ける處の無い様な非衛生的なものだ。今の者は衛生衛生と八ヶ間敷く云ふがシャツボと頬かむりとの比較研究は未について居らぬとみへる、經濟的な点から云ふてもシャツボの一圓五十錢よりかは手拭の十五錢の方が良いに決つて居る、それにシヤラボでは風呂に這入つて用を爲すものでもあるまい。現代の流行は目先のいいものの許りで實用と云ふ点を考へて居らない。困つた事じや。

「十歳、人力車と云ふものはいやにがたがたふれるものだ。」

「道路が悪るいからです、此道は郡道だから手入が届かないのですネ、此度政友會の縣會議員の盡力で縣道になるとの事ですから、さうしたら幾分よくなる事でせう。」

「じやなにか、道路と云ふものは郡道縣道でさう變りがあるものか、さうすると山の邊鄙な處に居るものと、町の繁華な處に居るものとは同じ税金を納めても其間に別け隔てがあるものか、た上と云ふものは依怙最負のあるものじやの。」

■平藝妓評判記【六】

甲子 子

「別け隔てをするのじやありませんか、ものゝ順序として人通りの多い處と少ない處とでは自ら區別をしなければなりませんから、た上が悪るいわけでもありませんね。」

甲子の主だ殆ど十年も務めて居る。色の白い、スナナリとした、現代的な顔をして居る姐さんだ、客との應接振りは親切でカユい處へ手のとどく様によく氣のつくのはヤハリ年の功であらう。常に夢でもみて居る様に温和しい、藝は勿論達者だ、いゝ旦那もある。

車乗る人、輓く人、其また草鞋を造る人と云ふ事があるが、いゝ若いものが汗を流し息を切りながら車を輓いて居るのをみると乗つて居つていゝ氣持はせぬワ、御祖師様の仰せに「他人様に難儀をかけてはならぬ」と云はれてあると村の和尚

が度々説教されワシも今迄只の一度も他人さまに難儀をかけた事無いが、今こうして御祖師さまの教に反く様な行をしたのも十藏奴の爲めじや。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

箕輪村大利の坂を登りつめると行手に當つて大變煙りが登つて居る。火事かしら、あの分では定めし山火事であらう。

「十藏、アノ煙は何んじや、山火事でもあるか」

「山火事ではありません、炭礦と云ふて石炭を堀る處です、石炭を堀るのに石炭を焚いて蒸氣と云ふソノなんです、力をつくるのです、汽車でも汽船でも石炭で動いて居るので大切なものですね」

「ア、石炭を堀つて居るのか、今日では石炭と云ふてをるが昔はくんのん礦と云つたものだ。それについては古い話があるのじや、ワシの知り合で内藤家の舊藩で加納作平殿と云ふた豪ら物があつた、この人の親爺で作次郎と云ふ人が安政五年八月江戸の明石屋治右衛門から泉村に黒船の動くに必要なくんのん礦又は五平太石と云ふものが

あるとの事だと云ふ話をきいて來て泉村を探しんだが、発見からなかつた。それで泉と云ふ字は白と水との集りだから或は内郷村白水では無いかと云ふのでソコを探して不動澤に初めて石炭を発見したのだ、作次郎殿が安政五年に不動澤に炭礦を開いて黒星炭と云ふて堀つて居つたが割に合はなくて散々な目に合つたのだが、其の倅の作平殿が後をついで文久二年頃から大變御用が多くなつて大變儲けたものだ、此地方で黒船と貿易をした最初の人を御前知つて居るか」

「知りません」

「さうか、それはやはり作平殿だ、明治四年二月に小名濱へ黒船がやつて來た。其時丁度作平殿が居つて定めし石炭が無い爲めに立寄つたのであらうと云ふので黒船に近かついてきいてみるとやはりさうだつたのださうだ。それで船に上つて船長と話をして三十俵十兩で千五百俵を買つたのが此地方で貿易をやつた始めだ、その船はロシアの船だつたさうだ」

「随分古い歴史があるもんですね、作平君は其後どうしました」

「なんじや、作平君とは、ワシより年の老つたものをつかまへて、友達の様な口をきく奴じや、作平殿とか、さんとか云ふものじや、無禮千萬な言葉はつゝしむがよからう、目上は目上と確立てわけをしなければいけない」

「お祖父さん、君と云ふのは何にも友達だけに使ふ文字ではありません、今の世の中は御互に平等で、偉い人も偉く無い人も皆平等に君で差支ないのです、学校の先生を呼ぶのにも今は君です。外国では陛下も君です」

驚いた世の中になつたものじやの、先生を呼ぶのに君か、昔は師の影を踏ますとさい教へたものだ。が今は師の影をふむ位はイトやすい事で、時と場合に依れば先生と争論位はし兼ねないのであらう。ワシも今まで十蔵十蔵と呼んで居たがこれから心掛けて十蔵君と云はすはなるまい。テモてれ臭い事じや。

「ソウか時世なりや仕方ないワ、作平殿は石炭で財産をつくつて石炭でつぶしたとの事じや」

「小田炭礦、古河炭礦元山を通つて古河炭礦堅坑へ来た、十蔵の先輩で大學を出た村

上政之助殿とやらが庶務係長をして居るから途中見物をしようとの十蔵の話で事務所を訪れた、應接間で初対面をしたが仲々偉らさうな御仁だ、身体の小さな人は智慧があるとの事は本當

かも知れぬ、所長さんの山田復之助殿も大學出で博士と云ふ偉い方に會

つた、博士なんかになる人はドコか特別に變つた顔付をして居るのかと

人であらう。大きな人はこの會社では使はぬとみゆるワ、係長さんの案内でソチコチを見物したがワシらの様な昔ものには一寸も呑み込めぬ、只ド偉な機關がしてあるも

■平藝妓評判記【七】

開花亭才

三

背巾の廣い、娘らしい顔の持主、金魚の口の様な小さな口をもつてゐるが、なかなか聲量のある唄方をする、應揚な風でなか／＼神經質らしい處があると見、一寸口をすべらすものなら、大したご立腹、男一人位どつて投げる位のご短氣、お客サンご用心。

人と變りの無いのは不思議千萬だ、この御仁も小さい所長さんも庶務係長さんも小さいのを見ると古河の殿様も身体の小さい

突然部屋が急に明るくなつた、みるゝ燈がともつて居る、誰れもつけに來たものが無いが不思議に思ふて十蔵にきいてみるとひとりでつかる電燈と云ふものじやさうだ、ホヤの掃除もいらぬで便利なものじや、これはメリケン人が考へ出したと云ふ話だが、不思議な事を考へ出すものじや、夕食もすましたし、今日は一日車に乗つて勞れも出たから寝るごしやう

「アハハア、あをつたつて消^きえるものではないです」

十藏が機械を捻ぢると消れた、十藏奴手ばなして笑つて居る、こりや平へ来て第一の失敗だ、平へまで来て笑はれるとはなさけない事じや、これからは十藏君に何事もきねてからやる事にしよう。(以下次號)

回腦留守

低い^{ひくい}のうぢ
低能^{ていねい}兒^ごをノールス（腦^{のう}留^{りゅう}守^{しゅ}）と稱^{しょう}して拆^{しりぞ}けてゐる新田^{しんた}町品^{まちしん}澤^{なは}の某^{ある}姐^{あね}さん^が、近^{ちか}頃^{ころ}頻^{あつ}りに妾^{めかけ}のレコは低能^{ていねい}兒^ごよと自慢^{じまん}さうに言^いふ、ノールスの旦那^{だんな}を持つ^もつこは酔狂^{すいきやう}にも程^{ほど}あるとよく／＼聞^きけば、テの字^じの聞^ききちがひ。



大姐姐さん達の 三方會組織

皆さんチヨットお集りよ、相談があるんだからと野口の政治の電話で何事か出来たかど集つたは湖月の小南、玉川の榮、林家の姫松、仲家の一寸助、榮家のもどめと云つた面々、意地の汚ないのは「姐さん御馳走でもあるノ」「イエ、そうじやないノ皆さんおき、ヨ」と政治が座長席に就いての説明大要左の如し、

「紅爛の創刊號に於て我々を猫に例へ、老は取つても色氣は抜けぬ」と侮辱したる事は我々の忍び難き處である、我々

一方の重鎮たるものが斯かる輕侮の念を以てみらるゝと云ふのも我々が團結せず個々に分離して居るが故である、依つて今後我々が一致團結して我々自身の向上を計り以て對社會的位置の向上を計らねばなりません。諸君の賛成を得ば私の最も欣幸とする處なり」

どの一大演説があつて他の諸員「賛成、賛成！ビツビイ」と云ふ騷の中に三方會と稱する團體が成立した。會則として第一藝を重んずる事、第二御客と出先に親切たる事、第三半玉をいたはる事の三ヶ條を定の會員たるものは其象徴として御座敷で小笠原式に三つ指をつえて挨拶す

る事となつたのを知らぬトンマな客が莫迦に叮嚀になつたねと云へば會員膝乗り出して會則三ヶ條を説明したのを、ききも敢えず嘘を云へ其の三ヶ條の會則は男がよくて、金持で、それで浮氣しても怒らない旦那の出来る様にこの事だらうそんな大それた由井の正雪の様な謀叛を起さず浮氣をせず、贅澤をせず、活動ばかりみ無い様に、お前さんからの心から直して行くがよからうとの話、仲家の一寸助全權委員と云ふ格で飛び出し、活動をみるのは藝術家！藝術を愛するからよ、贅澤するのも皆客の心掛けが悪くて、お寶をバツバと出すからのことよ

浮氣をするのも、男が浮氣をするからよ此節男女同權じやないの、とボンボン云ひまくつてしもうのに、お客たちだちとなつて、勘辨して呉れ、僕も三方會員になるから、然かし斷つて置くが僕の三條件は、第一に女房を可愛がる事、第二萬事節約を因とし、第三家業に熱心する事だよ、とブイと歸つてしまつたのを、三方會員アト見送つて「ア、云ふた客が多いから近頃困るわネエー」

藝妓、妾達を認めて頂戴よ！

お客「認めるもたゞ賤しい人間であるとお云ふことだけを」

◇平町料理屋評判記【一】

谷口樓

梅雨霽れの雲間から、夕暮れの陽がサツト弱い光りを投げる頃、あたりはもう夏らしい気分が漲つてゐる。新田町邊りには、湯歸りの美しい妓が二三人、何にこそが囁きながら、歩いてゐる、弱い陽が、妓の美しい襟足に照りそめて、其處にのみ言はれぬ美しさと、色町の風情が流れきつてゐる。

そふした気分の中をくぐりぬけて、平一流の料理屋として知られてゐる谷口樓の玄關とくぐつたのは四時頃……サアど

ふぞこちらへ……とねばりつくやうな愛嬌を振りまかぬかはりに、どこかに慣れ慣れしい氣もちのよい女中かねちゃん、二階「節の間」に案内する、流石一流どころの料理屋だけあつて、其處にセツセと立ち働、女中迄も、どこことなく應揚な處がある。

「節の間」の直ぐ下には、庭池があつて緑陰小暗き池の面には、ボツチリと赤く見られる金魚が浮んでゐた。

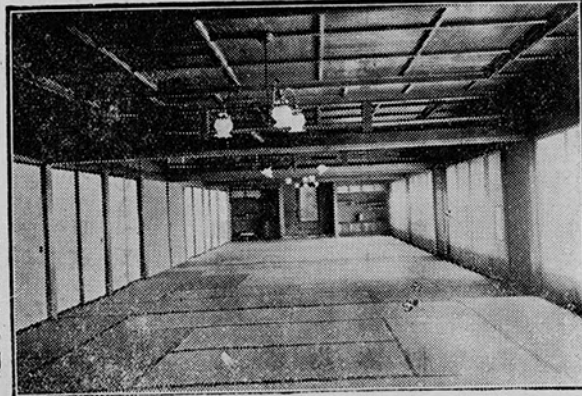
……何ににいたしませう、酒にしませうか、たビールにいたしませうかしら……如才のないかねちゃん、早速銘々膳を運ぶ。次ぎ次ぎに運ばれる、通しのジン

菜に味感をそそり、なす、いんげん、煮した鼓をうつて、ビールの満を引く、S社長は月桂冠をチビリチビリと舌を鳴らす、さまたやさと鳥まんちうに咽喉が鳴る、遺憾な事には、谷口得意の料理「柳川もどき」が喰へないことであつた。

電灯がバットともされて、谷口樓の室は、一どきに、美しく輝いて、さん、さめく三昧の音が、静かに流れた、微風に庭園の植込みの若葉がゆるぐ。

しづ／＼のぶやうに這入つてきたのは、「新進の畫家として有名な伊藤深水の好みさうな、スナナリとした美人型の女」前號の藝者評判記にしるされた谷

口の、小染、何故、にか、ボー、顔、を紅、くし、て、アラ、妾見、まじ、がつ、てよ



(谷口樓大廣間)

……何んだか、恥づかしいわ……熱いこ
と……謎のやうな事を言つてはハンケチ
で、顔を拭いてゐる。

小染が「節の間に這入る刹那に、顔に
朱を注いで、アラアとはにかむ、姿態は
何ごとか包まれた、嬉しい謎でもある
らしい。

……いつの間にか「節の間」には小田吉
次さん、江口忠一さん、戸田さんといふ
大男が車座となつて、小田さんの怪氣煽
精力最善活用、自他共營なんぞと唸る
處などは無邪氣なものだ。

交るゝに入ってくる女中頭のかつ
子姐さんに、娘らしさを又うせないかね

ちやん、た客の取りなしなか／＼巧みな
もの、又そのうち、それでは、たしづか
に……と玄關前に立つて見送る頃、梅雨
は又しと／＼と降りしきつてゐた。

勘定書

一金參圓參拾錢	御料理二人
一金壹圓五拾錢	澤の鶴三本
一金參圓	小染
一金六拾錢	ビール一本
一金參拾錢	敷島二個
計金八圓七拾錢	

(同不順) 合聯院醫町平

平町研 鈴木眼科醫院 電話四三八番	平町研 矢吹醫院 電話二六六番	平町紺屋 吉田眼科醫院 電話六八番	平町紺屋 藤沼醫院 電話五〇七番	平町南 星眼科醫院 電話四七一番
平町南 大森醫院 電話二五八番	平町南 酒井醫院 電話五五番	平町南 新妻醫院 電話二一九番	平町南 根本醫院 電話三四番	平町田 合津醫院 電話五五九番

醫 院 案 內

平町北裏通り

横内耳鼻咽喉科醫院

電話二二七番

平町ネズミ坂

渡邊醫院

電話二五四番

平町大工町

志賀齒科醫院

日本齒科
醫學士 志賀與市

平町南町(元鈴木醫院跡)
丹羽病院繼承

新妻醫院

電話一二九番

平町田町

森合齒科醫院

平町田町

明雲堂眼科院

著 名 料 理 店 案 內

割烹 平南町
大和家
電話十四番

會席 平町二丁目
御料理 谷口樓
電話八番

和洋 平仲田町
御料理 千鳥
電話九番

大蒲焼 平町二丁目北裏
井柳川 魚
御料理仕出し
榮

名代のそばと洋食は
平驛 日の出そば店に限る
電話四四番

夏の御涼みは
平公園
春木屋

御料理 平町二丁目裏
壽遊亭
電話一五二番(呼)

大蒲焼柳川 平町
鯉鳥料理 壽々喜亭
藥湯の設備あり
電話五八番

著名吳服商案內

良^{ヨイ}品^{シナ}廉^{ケン}賣^ウ 平町三丁目 中野吳服店 電話六十七番	磐城平町二丁目 柏屋吳服店 電話一六一番	平町五丁目 久保濱吳服店 電話四二〇番	夏衣 特價 企^キめさかや吳服店 平町古鍛冶町通り
平新川町 終始一貫主 フダン勉強義 諸橋吳服店 電話五〇番	平町 紙屋吳服店 電話二五六番	平町一丁目 仙臺屋吳服店 電話一一七番	平町三丁目 三井吳服店 電話三十八番

著名商店一覽

一般寫真攝影 寫真中島寫真館 寫真應用印刷	平町三丁目 丸ほん漆器店 電話三五九番	時計貴金屬蓄音機は 平町四丁目 會田時計店 電話三六三番	銘酒國光味噌醬油 會津屋小原喜八 平町一丁目 電話四六二番
平町一丁目 和久井屋漆器店 電話四〇五番	平町一丁目 常盤屋時計店 電話三三九番	平町田町 肉^{ニク}三二三屋 電話三二三番	家庭に最も必要ふ シンガーミシン月賦販賣 無料教授いたします 平町白銀町 ンシガーミシン女學院
疊^{タテ}表^{ウラ}、花^{ハナ}ゴザ 平町四丁目 山城屋商店 電話一六二番	平町 白菊廣瀨支店 電話五十四番	經濟の親玉は 一個僅か一錢 色川タドン	平町大工町 栗野屋酒店 電話四一〇番

活版印刷部
加納活版部
平町印刷部
電話 四〇九番

大正十二年七月十日印刷納本
大正十二年七月十五日發行 每月一回十日發行
本誌一冊金參拾錢 半ヶ年金壹圓七拾錢
定價(壹ヶ年金參圓貳拾錢(郵稅共))

編輯兼 鈴 木 昌 雄
發行所 加納活版部
印刷所 佐藤 作 平
福島縣石城郡平町紺屋町十四番地
福島縣石城郡平町紺屋町十五番地
福島縣石城郡平町紺屋町十四番地

發行所 紅 爛 社

先づ御買物は鹽屋へ!!!

準備が整つて居ります

在庫品全部

大々的 特價

提供!!!

◇商品券(優美高尚なれば中元進物
用として最も便利です)

平町土橋

舍鹽屋吳服店

電話 二十一番
口座東京(三九三六九番)



電気機械器具一切
各種モートル
新式國産式精米機
超子一ゼル發動機
昇降器製作
精密工業製作
◎◎◎はまれ工業製造アイスク
リム製電機
自家共同用發電機
設計及工事請負

平町搔搥小路
松崎精電舍
電話 四四四九

舍主 松崎 啓祐

先づ御買物は鹽屋へ!!!

準備が整つて居ります

在庫品全部 提供!!!
大々的特價

☐商品券 (優美高尚なれば中元進物
用として最も便利です)

平町土橋

舍鹽屋吳服店

電話 二十一番
口座東京(三九三六九番)



電氣機械器具一切
各種モートル
新式國産式精米機
超歩式自動機
具降器製作
具精工製作
◎は精製式アイスク
◎は精製式アイスク
自家共同用發電機
設計及工事請負

平町土橋路
松崎精電舍
電話四四九

舍主松崎啓祐

活版印刷

加納活版部

平町紺屋
電話 四〇九番

大正十二年七月十日印刷納本
大正十二年七月十五日發行 毎月一回十日發行
本誌(一冊金參拾錢 半ヶ年金壹圓七拾錢
定價(壹ヶ年金參圓貳拾錢(郵稅共))

編輯兼 發行人 鈴木 昌雄

印刷人 佐藤 作平

印刷所 加納活版部

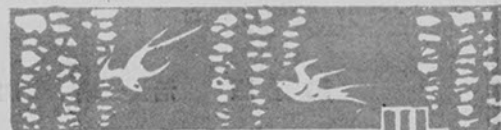
發行所 紅爛社

福島縣石城郡平町紺屋町十四番地

福島縣石城郡平町紺屋町十五番地

福島縣石城郡平町紺屋町十四番地

福島縣石城郡平町紺屋町十六番地



夏の
お召ものは
御中元の
贈答品は

良き安い
品物は
安心して
買いき店は



平三町目

三井呉服店

電話 三十八番